

論文

精神障害当事者の語りをもたらす社会変革の可能性

栄 セツコ*

I. 研究の背景と目的

エンパワメントは、1960年代の公民権運動や抑圧された者に対する解放教育運動などの影響を受けて形成された概念である (Gutierrez 1990 : Lee 1994 : Cox & Persons 1997)。1976年にソロモン (Solomon 1976) がソーシャルワーク領域に紹介し、リーらによってソーシャルワークのアプローチの一つとして体系化された (Lee 1994)。その特徴は、パワーレスな状態にある人々の潜在的な適応力の強化 (自己改革) と社会の抑圧構造の変革 (社会変革) を目的とし、個人的、対人関係的、組織的、政治的次元といったマイクロレベルからマクロレベルにおける多元的介入を提示したことにある (Cox 1989 : Cox & Persons 1997)。

そのようななかで、近年、病いの語りの特徴を活用したエンパワメントに関心が高まってきた。『病いの語り』を著したクラインマンは、病い (illness) を疾病 (disease) の対極に置き、「“疾病”とは生物医学的プロセスと心理的プロセスの両方あるいは一方の機能不全であるのに対し、“病い”とは知覚された疾病の心理社会的な体験のされ方や意味づけをさす」 (Kleinman 1996 : 76) と述べている。それをふまえると、疾患をもつ当事者が病いの経験を再定義し、主体的に人生の統制を図るには、「病いの語り」の行為が不可欠といえる。この行為には、病いの体験を意味づける行為と病いの体験を他者に伝える行為があり、エンパワメントに深く関連する特質がある (栄 2015)。前者の行為はクライアント自身を主人公とした主観的な世界を形成し (Bruner 1999)、病いの体験に意味を見出す特質があり (Saleebey 1997 : 狭間 2001)、自己改革の可能性を生む。また、後者の行為は他者と病いの体験を共有することで、他者の感情や考えに影響を与えるという特質がある (やまだ 2000)。その特質を活用することによって、社会の抑圧構造に対する批判的な語りの承認者が増えることで社会変革の可能性が生まれる (Freire 1979 : Plummer 1998)。

また、先行研究によると、援助専門職による面接 (個人的次元) や同じ病いの経験をもつ当事者同士のグループ (対人関係的次元) の語りには、当事者にエンパワメントをもたらす方策がみられる (三島 2001 : 川浦 2004 : 野口 2009 : 伊藤 2013 など)。しかし、公共の場における語り (組織的次元/政治的次元) が、いかなる方策によって当事者にエンパワメントをもたらすのかについて論じたものはあまりみられない。

そこで、筆者はエンパワメントの組織的次元に着目し、それに合致する公共の場の語りについて、面接やグループの場の語りと異なる独自のエンパワメントの可能性と課題を整理したうえで、精神障害当事者の語り部グループ「びあの」の実践事例をもとに、公共の場の語り当事者にエンパワメントをもたらす方策について論じてきた (栄 2014 : 2015)。「びあの」とは、当事者が公共の場である教育機関に出向き、子どもに病いの語りを行うグループの名称である。この場合、当事者の語り子どもに教育的効果を生むことで、その語りを行った当事者にエンパワメントがもたらされるため、当事者は子どもに精神障害者に対する偏見が助長しないような定型化された「リカバリーの物語」を語らなければならなかった。しかし、その語りの内容は面接やグループで語られる病状の辛さや生活の

キーワード：精神障害当事者、公共の語り、社会変革、ハーバーマスの意味での市民性、アレント的な意味での活動的生

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013年度3年次転入学 公共領域

しづらさという「ありのままの物語」との齟齬が生じた。そこで、当事者が「リカバリーの物語」を子どもに語る活動を継続していくためには、「ありのままの物語」を語るができる面接やグループの場を「リカバリーの物語」を語る公共の場の裏舞台に設定する必要性を提示した(栄 2015)。このような多様な語りが可能となる多元的な語りの場を用意した「びあの」の実践は、当事者に一定の組織的次元のエンパワメントをもたらすことができた。しかし、新たな課題も析出された。それは、社会変革を目指すエンパワメントを達成する「政治的次元」の活動をいかに設定するのかという課題である。エンパワメントに関する先行研究では、面接の語り、グループの語り、公共の語りは、それぞれ「個人的次元」「対人関係の次元」「組織的次元」の語りに等置するが、実際にはそれらの語りは「発展段階」として位置づけるものではなく、同時的・重層的かつ往還的なプロセスとして捉える必要があった(栄 2015)。このことに鑑みれば、社会変革を目指すエンパワメントは組織的次元に政治的次元を組み込む必要があるといえる。

政治的次元のエンパワメントについて、コックスとパーソンズは「クライアントが自分たちの問題の政治的側面にかかわっていくことであり、それに焦点をあて、個々人の問題の誘因になっている抑圧的な社会に影響を与えるソーシャルアクションやその他の集団的な努力が含まれる」(Cox & Persons 1997: 63) という。つまり、当事者の語りを媒介とした政治的エンパワメントとは語りの賛同者の増大にあるといえる。そのため、援助専門職はクライアントの抑圧的な社会構造に対する批判的意識を高め、ソーシャルアクションなどの行動化を習得する教育の機会の提供とともに、同様の目的をもつグループ同士を結びつける役割があるといえる。

そこで、本稿の目的は精神障害当事者の語り部グループ「びあの(以下、びあの)」の実践事例をもとに、エンパワメント実践における組織的次元の活動(公共の場の語り)の課題から社会変革を目指す政治的次元の活動を組み込む方策を提示することにある。

その方法として、「びあの」を「卒業」し、独自の活動を始めた者(以下、「卒業生」)に着目した。「卒業生」は筆者ら援助専門職がデザインした活動に物足りなさや窮屈さを感じ、「自分の語り」に向けて挑戦する人々とも捉えられた。言い換えれば、エンパワメントの組織的次元にあたる「びあの」の活動に対して、「卒業生」はその不備や改善点を指摘し、当事者のエンパワメントを達成する政治的次元の方策を教示できる可能性があるといえる。

本稿の構成は、第一に「びあの」の活動を紹介し、その活動の参加者をエンパワメントの観点から分類する。第二に「びあの」の「卒業生」を紹介する。第三に「卒業生」へのインタビューから、「びあの」の活動における課題の析出とともに、語りの活動がもつ政治的次元のエンパワメントの可能性を提示する。そして、「びあの」の活動を「公共の語り」に汎用し、エンパワメント実践の政治的次元の活動を組み込む方策を考察する。

Ⅱ. 語り部グループ「びあの」の概要とその活動に参加した当事者のエンパワメント効果

1. 語り部グループ「びあの」の概要

語り部グループ「びあの」とは当事者の語りを就労形態の一つに位置づけ、当事者が教育機関に出向き、子どもに病いの経験を語る活動をしているグループである。その目標に「精神障害の有無にかかわらず、誰もが共生できる社会の創造」を掲げ、2006年度から試行的に精神保健福祉教育活動を行ってきた。2年間にわたる当事者による介入教育によって、中学生784名の精神障害者に対する偏見の低減等がみられた(山口・栄他 2010)。このような当事者の語り子どもに教育的効果を生んだことや、語りの活動の継続を希望するメンバーがいたことから、正式に2008年に語り部グループ「びあの」が結成された。事務局はメンバーが所属する法人Hに置き、構成員は語り部養成研修修了者10名と法人職員2名、筆者ら研究者3名である。当事者は病いの経験を語る表舞台を、筆者ら援助専門職は語りの実施機関の開拓やその調整などの裏舞台を担った。主な活動は教育機関における「病いの語り」に基づく講演の成功を目指した研修にある。

2. 語りによる当事者のエンパワメント効果

「びあの」の活動に参加した当事者15名(第3回養成研修までの修了者)をエンパワメント効果に照らし合わせてみると、次の2つの型に分類できた(栄 2015)。

第一に、組織的次元のエンパワメントを獲得した者(10名)であり、「外部講師」という社会的地位、語りに対す

る聞き手の承認という精神的報酬、語りの対価という金銭的報酬を獲得した者である。それらの人々は「語りの活動発展型」(4名)と「リカバリーの物語普及型」(6名)に大別できた。前者は「びあの」の「卒業生」である。「卒業生」とは「びあの」の一連の活動を経験し、組織的次元のエンパワメントの経験を基に、本人が望む就労形態に発展的に移行した者をいう。後者は「びあの」の活動を継続しながら、モデル・ストーリーをより精巧なものにして、後継者を育てたいと望む者である。

第二に、「びあの」の活動に参加しながらも、自分に適した活動を模索している者(5名)である。その人々には「語りの活動模索型」(4名)と「ありのままの物語普及型」(1名)が存在した。前者は自分に適した創作／就労活動等を模索している者であり、後者は聞き手のニーズよりも病いの物語を赤裸々な体験で語り直したいと望む者である。

本稿では、「語りの活動発展型」の人々に照準をあてる。その理由は「卒業生」は「びあの」の活動とそれを発展させた現在の活動との比較が可能な点にある。つまり、エンパワメントの組織的次元の課題を析出し、その解決方法を明示することで、「公共の場の語り」を発展的に社会変革する方途を導き出せると考えたためである。

Ⅲ. 「語りの活動発展型」に属する当事者の紹介

ここでは、組織的次元のエンパワメントを獲得した「語りの活動発展型」の4名について紹介する。個人情報保護の観点から、実名使用の同意が得られた者以外は仮名とした。

1. 山元さん(仮名)

山元さんは、セルフヘルプ・グループ(以下、SHG)に所属し、法人Hでピアスタッフ(非常勤)として勤務していた。「びあの」の参加動機として「子どもができて、一人の人間がたまたま『精神障害』をもったにすぎないことを伝えたい」と語っていた。4年間の活動を経て、「語りの活動は不定期なので、ピアスタッフの仕事に重きをおきたい」と語り、「びあの」を卒業した。その後、ピアスタッフとして勤務していたが、「ピアではなく、『普通』に働きたい」と法人に希望し、健常者の職員と対等に勤務している。

2. 鈴木さん(仮名)

鈴木さんは「びあの」の参加時、「病いの体験を医者が語ることに抵抗があった。自分の言葉で語っていききたい」と発言していた。研修では、「語りは病気である自分とのつきあい方を学ばせてくれる」と語りの有効性を言葉にしたり、カナダの当事者主体による就労活動に関心を寄せたりしていた。そして、4年間の活動を経て、「びあの」を卒業し、その後、当事者の生活支援に従事している。

3. 森さん

森さんは「びあの」の活動以前から、SHGの相談員、執筆活動、講演会活動をしていた。「今まで一人で活動してきたので、改めて語りの研修を受けたい」と希望し、3年間の活動を経て「びあの」を卒業した。現在は、執筆活動や講演会活動のほか、職業リハビリテーションセンターの講師、障害者自立生活センターの相談員(非常勤)をこなしている。

4. 山田さん(仮名)

山田さんは「びあの」活動以前から、SHGの活動や福祉職(有資格)の仕事をしていた。「病いの体験を子どもに語ったことがない」と参加動機を語り、3年間の活動を経て「びあの」を卒業し、病いの体験に基づく執筆活動に加え、演劇で表現する活動を行っている。

以上のように、「語りの活動発展型」のうち、山元さんと鈴木さんは「びあの」の活動を「ピアサポーター」などの仲間の支援や、当事者の視点を反映させることができる有償の職務に発展させていた。また、森さんや山田さんは「びあの」の自己物語の表現方法をアレンジし、不特定多数の人に向けた講演会や演劇などに応用していた。

Ⅳ. 公共の語りである「びあの」の活動のジレンマ

エンパワメントの組織的次元である「びあの」の活動の課題を明らかにし、政治的次元のエンパワメントの可能性を提示するため、「語りの活動発展型」に属する森さんと山元さんに半構造化面接を行った。先述のように、二人の選定理由は「びあの」の語りを発展させて、異なる語りの活動を展開していることによる。調査内容は現在の活動と「びあの」の活動の課題である。調査は2015年7月に実施し、時間はいずれも2時間程度である。倫理的配慮として、両者に本研究の趣旨を説明し同意を得てインタビューを行った。その内容は本人の同意を得て録音し、作成した逐語録は本人の確認を得た。分析は逐語録の他に、フィールドノート、出版物等を使用した。分析方法は「びあの」の活動で満たされなかった内容と、それを補完する現在の活動を対比した。その結果、4つの課題が抽出された。

1. 「びあの」のメンバーによる同調行動の圧力

第一に、公共の語りの実現に向けたメンバーによる同調行動の圧力である。「びあの」ではグループ活動を採用した。その理由は、「びあの」の活動が当事者の病いの語りに着目した活動であり、グループにおけるメンバー同士の語り合いが個々のメンバーのエンパワメントに有効的という先行研究が数多くあったこと (Riessman 1965: 岡 1999: 野口 2002)、また筆者自身の援助専門職の経験から、グループの凝集性は個々人の総和以上の力を生むという経験知があったことによる。実際に「びあの」の実践では、メンバー同士による病いの語り合いによって、メンバーに孤独感の解消、仲間意識の醸成、モデル・ストーリーの獲得、批判的意識の高揚等がみられた (栄 2014)。この経験により、グループのメンバーシップが芽生え、「びあの」の活動目標の達成という共通の認識が得られるようになり、メンバーに「共通運命」(Lewin 1948) の意識がみられるようになった。だが、このように凝集性が高まったグループでは、グループの規範と異なる発言は採用されなかった。

まず、森さんが「病名を知ってもらうことも大切」「早期治療は必要ではないか」と発言した場面を紹介する。筆者が教育機関の管理職から『「精神障害」という言葉を教えることがいじめの原因になる危険性があると言われた…』と報告した時、森さんは『「精神障害」が「差別やいじめの原因になる』と言われるけど、『うつ病』『統合失調症』の言葉は使っていないと思う』と発言した (2010年6月11日)。また、子どもに対する早期治療の議論でも、あるメンバーの「早期治療はよくない」という言葉に対して、森さんは「医学書の症例で、3年間、ほったままでは予後が悪い。早期介入が効を奏することもある」と発言した (2011年11月18日)。しかし、疾患理解や早期治療の勧奨は専門職でも可能という意見がメンバー間で一致した。森さんに当時について振り返ってもらった。

中学生は統合失調症になりやすい時期なのに、そのことはあまり知られていないし、偏見もある。病いの経験をした者から、統合失調症について説明していきたい。子どもの場合は症状をそのままではなく、言葉を工夫したり、紙芝居などの道具も使ったりしている。

このように、精神疾患の好発時期にある子どもの疾患理解の重要性に鑑み、森さんは教育機関の管理者から承認される語りに工夫する必要性を指摘する。現在、森さんは語りの技法を駆使しながら、子どもに必要な「ストレスと発病の関係」を説明しているという。

次に、山元さんの「営業を担当したい」と発言した場面を紹介する。筆者が「語りの活動に賛同する教育機関が少ない」と語りの場の開拓という「営業」の難しさを相談した時、山元さんはその「営業」を希望した。その背景には、当時の山元さんは病いに関心の示さない子どもへの語りの困難さを感じていたことと、「カナダの当事者主体による就労活動」の研修において、個人の得意分野を生かす社会活動に関心を寄せていたことがある。しかし、グループの凝集性の高まりにより、メンバーと援助専門職の役割分担が認識されてくると、それとは異なる山元さんの発言は採用されなかった。当時のことを山元さんに尋ねた。

今も『びあの』の裏舞台に当事者が入るべきだと思いますね。当事者が生の声で営業する。生の声はリアル。(リアル?) それは心に届くってこと、臨場感があるでしょ。

このように、山元さんは当事者が裏舞台を担う意義を語る。ピアスタッフの経験がある山元さんは「(営業の仕事は)自分たちがやると時間がかかる。失敗もある。でも、その経験によって、こちらは力をつけることができる」と語り、一人の人間として多様な経験をする機会の重要性を指摘していた。現在、山元さんは法人職員として、病いの経験者の立場から、利用者の声を代弁したり、組織運営に反映したりしているという。

以上のように、グループの凝集性により形成されたグループの規範とは異なる森さんと山元さんの提案は採用されなかった。この課題に対して、両者はこれまでの経験を生かし、異なる方向性から極めて現実的な解決策を提案していた。森さんは精神疾患の好発時期にある子どもにとって必要な「疾患理解」に対して、教育機関に承認される「語り」の工夫の必要性を示していた。一方、山元さんは営業活動といった裏舞台を当事者が担うことで、定型化された「リカバリー物語」とは異なる内容でも承認される場を開拓したいと願い、その経験が当事者にとっても生きる力をつけていく機会になると語っていたのである。

2. 語りの「聞き手」の限界

第二に、公共の語りにおける「聞き手」の限界がある。「ぴあの」の活動では、当事者の語りの聞き手に教育機関で学ぶ子どもを設定した。その理由は次の二点である。第一に、思春期・青年期の子どもが精神疾患の好発時期にあたり、その疾患理解が必要なこと。第二は、教職員が公権力を生かして子どもの授業態度を統制することができるため、語り手に対して安心して語りができる安全な場を保障しやすいことである。その背景には、公共の語り聞き手の子どもに教育的効果を生むことで、当事者にエンパワメントをもたらされる特性があることを意味する(栄2015)。しかし、実際の語りの場面では、子どもに携帯を見たり、居眠りしたりする姿がみられ、森さんも山元さんもそれを体験していた。当時を振り返り、森さんは次のように語った。

高校生は残酷。携帯は見るし、ドターツと寝るし。高校生に語るのはハードルが高い。語りの初心者には大学生くらいがいい、目的もわかっているし…。講演会は障害や病気の話聞きにくる。経済効率を考えると、授業よりも講演会の方が一度に啓発できる数は多い。子どもにも自分のこととして障害理解をしてもらうことは大切ですけどね…。

森さんは、高校生を聞き手として病いの経験を語る難しさを指摘していた。森さんの語りの目的は「統合失調症」に対する理解者を増やすことであり、それを可能にする講演会活動に対して、「語りの活動が一度に多くの人に語りかけることが啓発になるのなら、私にとって社会的意義が大きい仕事です」と語っていた(2011年8月4日)。しかし「ぴあの」の活動では、学校から講演依頼が少ない現状では聞き手の数はそれ程多く望めない。森さんは不特定多数の人々に向けて啓発できる講演会活動に力を入れたいと「ぴあの」の卒業時にも述べていた。現在、森さんは年間30回程度の講演をこなす。その一方で、森さんは執筆活動にも精力的である。書籍は、講演会に足を運ばない状況にある当事者や家族、精神障害者に関心がない人々にも「語り」を届けることができるという利点があるという。

一方、山元さんは「発病当時の辛さを子どもに語っても、この辛さはわかってもらえない」と発言し、バーチャル体験を提案していた。山元さんに、当時を振り返ってもらった。

頭が柔らかいうちに「障害者」のことを学んでほしい。小学生は吸収が早い…。(寝たり、携帯を触ったりする子への語りは?) その伝え方が難しいし、語り方を学ぶ必要がありますよね。今は身近な知り合いから自分の病気のことを話しているんです。「啓発」としてね。

山元さんは「ぴあの」の活動当初、父親になったことを機に精神障害者に偏見がない子どもに対する啓発活動の必要性を語っていた。しかし、自身の語りに関心を示さない子どもとの出会いによって、聞き手との関係性の重要性に気づいた。現在、山元さんは着実な啓発活動を目指して、信頼できる身近な人間関係のなかで病いの体験を伝えている。

このように、森さんも山元さんも、精神障害者の語りの聞き手として子どもに照準をあてる必要性を理解しながら

らも、その語りに関心がない子どもに理解を求める限界を体験し、「ぴあの」の活動とは異なる方法で賛同者を増やす方を提案していた。森さんは不特定多数の人々を対象とした講演会や執筆活動であり、山元さんは一人の人間として信頼できる身近な人間関係に向けた啓発活動である。

3. 物語性：定型化された語りの限界

第三に、公共の語りにおける物語性の問題である。「ぴあの」の活動目標が子どもの教育的効果にあるという共通認識が高まるほど、メンバー個々人の物語は定型化された「精神障害者のリカバリーの物語」に収束されるようになった。具体的には、誰もが精神障害になる可能性はあるが、それを克服しうる方途もあると主張する物語のことを指す(榮 2014)。このような語りは子どもへの教育的効果があるものの、精神障害をもつ個々人の豊かな生活世界の隠ぺいという抑圧状況を生むことにもなる。結果として、「ありのまま物語」と「リカバリーの物語」に齟齬を感じるメンバーが現れ、執筆や演劇という創作活動をする者とその物語を書き換える者がでてきた。森さんは前者であり、山元さんは後者といえよう。

森さんは活動当初から「うつ病の理解が進むなかで、統合失調症の理解は未だ進んでいない。その助けになる活動をしたい」と希望していた(2010年2月22日)。森さんには既に数多くの講演会の経験があったため、公共の場で語ったことがないメンバーに対して助言者の立場を担っていた。たとえば、「自分の原稿は体験が7割、メッセージは3割に配分している」という物語の構成や、「今でも辛い体験を思い出すと涙がでる。あまりにも辛い体験はカットしている。人前と言えぬことを言えばいい」と語りの内容に関しても助言していた。そのような森さんに、現在の講演会活動について尋ねた。

うつ病はなんとなく理解されやすいけど、統合失調症はなかなか理解されにくい。その症状の理解が進んでほしい…。「幻聴、妄想って何？」ってことを漫画で説明しています。でも、病気の話は暗くなりがち…。聞き手も暗い体験ばかりを聞かされてもしんどくなる…。それで、「明るく、楽しく、面白く」をモットーに、漫画で幻聴を説明したり、皆が眠くなる20分くらいに歌を入れたり、最後はエドはるみさんのゲーゲーダンスを踊ったりしています。(すごいですね!) エンターテイメントってそうですよね。

このように、森さんは、可視化できない統合失調症の症状を多様な方法を用いて表現している。執筆活動も同様である。活動当初は病いを患う体験を詩で表現していた。その詩集に魅了されて出版を後押しした新聞記者は、「ユーモアをふんだんに交えた表現力は卓越しているし、記者が取材して書く記事とはまったく違う迫力がある」と絶賛する(原 2006: 71)。「幻聴と二人三脚で原稿を書く」という森さんに執筆のよさを尋ねた。

執筆活動は空いた時間にできるし、場所を問わない。自分のペースで書けるのがいいですね。もともと、詩から始めたのはまだ体力や集中力がなかったからで、書くことでカタルシスが得られたことも大きい。(カタルシス?) 書くことはどろどろした部分、苦しみの部分を吐き出すことになって、デトックス効果になるっていうか。あと、幻聴や妄想の体験を書くことで、それを客観視することもできますし…。メタ認知というか…、人にわかってもらおうとあれこれ工夫しているなかで病識が深まることにもなるんです。

森さんは、統合失調症の理解を得るために、その表現方法を駆使している。たとえば、カタカナで幻聴を表記する方法がある。

私はベストセラー作家になるのは無理だよ。もう、文章を書くのはやめたいコトハナイ。やめたクナイ(森 2013: 222)。

また、送り仮名の箇所には幻聴の科白をいれる手法も編み出している。

ナニヲ、イッテイル。サッサトオキロ。キョウデキルコトヲスコシ、デモスルヨウニシヨウ。
ああ、今日は書く気がしない。もう少し眠りたいので、執筆は明日にしよう（森 2013：222）。

さらに、幻聴のカオスの状態を利用して、それぞれの幻聴の言葉をそれぞれ異なるかっこの中に入れる手法も開発している。

こんなことを考えながら、歩いていると、ふと [苦しいけれど、楽しい毎日なんて言ったら嘘になるかもしれないが 嘘に決まっている。苦しみを喜びと感ぜられるのはマゾヒストだけ（でも、そうはいつでも、楽しみもないでしょう） …（中略） …もう笑い声が聴こえているでしょう] 気にせず、私は私の道を行く（森 2013：224）。

このように、森さんの生活用語で表現された「統合失調症」は読み手にとってイメージしやすく、その理解を容易にするものだった。「びあの」の活動に比べて、講演会や執筆活動がより多くの人々に影響を与えることを経験した森さんは、その症状の説明方法の開発に努力を重ねた。今では全国各地から講演依頼があり、谷川俊太郎氏や五木寛之氏などとの対談もこなすほどのエンターテイナーとして活躍している。そのような森さんは「統合失調症の人たち」のことを、以下のように表現する。

統合失調症の人たちは世間のバキュームカー、各地の汚物を吸いとり、わけのわからない独語や笑顔にデフォルメさせ、表現芸術へとトランスフォームさせるクリエイターなのだ。変形文法を自由に駆使し、メタモルフォーゼする彼らこそ、時代の先駆者、ただ、時代が彼らに追いついていないのである（森 2013：239）。

森さんが表現する統合失調症の人たちは、弱く保護すべき存在としての「病者」「障害者」の像とは異なり、幻聴や妄想という形を使って、抑圧的な社会構造に警鐘を鳴らす人々というイメージを受ける。このように、森さんは多様な表現方法を開発しながら、統合失調症の理解を求める啓発活動を行っている。

一方、山元さんは「リカバリーの物語」を語ることに、ある種の胡散臭さを感じていた一人であり、それを「びあの」を卒業した理由の一つとしてあげていた。

ハッピーエンドの物語を語ってよいのか…。実際に、病状も不安定、家庭的にもしんどい、悩みを抱える自分がハッピーエンドの語りをすることに違和感があったんです。

山元さんは「びあの」の卒業後、私生活の悩みに直面することがあり、その経験をふまえて、改めて子どもを対象に語りたいたいという。しかし、それは「リカバリーの物語」ではなかったのである。

ハッピーエンドの話はもうしない。自分の生き様をみてもらって、何かを感じてもらいたい。何かを伝えるのではなく、子どもがそれぞれに感じてもらえればいい。精神障害者の山元、統合失調症の山元でもない、一人の間人である山元がたまたま病気を患った語りから…。それが啓発になると思う。

山元さんは「啓発」という言葉を使い、定型化された語りのように教訓を教えるのではなく、「ありのままの自分」の語りから何を学ぶかは子どもにまかせたいというのである。

このように定型化された「リカバリーの物語」を語らなくなった二人であるが、その物語性に大きな違いがあった。森さんは統合失調症の人たちの内的世界をクリエイティブに表現し、聞き手がもつ社会の精神障害者像を覆す創作活動をしているのに対して、山元さんは「啓発」と称して「ありのままの自分」を信頼できる人々に語りながらも、人々にその解釈の方向性を与えない禁欲的な語りを行っている。

4. 金銭的報酬の意味づけ

最後に、金銭的報酬の課題である。「びあの」では、語りの聞き手（の所属機関）から語り手にその対価が支払われるシステムになっている。当事者のなかには、その対価によって、病いに対する肯定感や語りを行う自己効力感を獲得する者も多かった。あるメンバーは「語りに対する報酬は自分の生き様に対する価値だと思う」と語っていた。「語りの対価をもらうのは当然のこと、それにかかる準備は大変なこと」という森さんに、金銭的報酬について尋ねた。

講演会でお金をもらっても、私の人生50年間の苦労やそこから得た知恵を語っているわけだし…。聞き手が聞きたいこと、知らないことを語りに盛り込むためには情報も得なければならない。それに費やす本代、語りの原稿を書く時間を入れると、それなりの対価をもらって当然のこととっているんです。病いの体験談だけでは2度と声はかからないでしょ。単価を上げる努力、また声をかけてもらう努力は常にしていますからね。

このように、森さんにとって、語りの金銭的報酬は当然の対価であり、報酬以上の「語り」になるよう、パフォーマンスに対する努力を惜しまない。単なる病いの体験談に留まらず、「明るく、楽しく、面白く！」をモットーとする語りを目指し、専門書や自己啓発書並びにビジネス書など1か月の読書量は30冊を下らないという。

一方、山元さんは日頃の「ピアスタッフ」の業務で手にする賃金と公共の場の語りに対する謝金の差が大きくなるほど、金銭的報酬に対して疑義を抱くようになった。研修でも「語りの活動はぼろい」「やくざの商売」という発言があったが、それは山元さんの悩みでもあった。そのこと振り返り、山元さんは次のように説明してくれた。

障害者が仕事で手にするお金はしれているんです。それに比べて、語りでもらうお金は破格…。1回の語りの値段は日ごろの業務で稼ごうと思うと何時間もかかる。もともとは啓発を目的に語りを始めたはずで、お金をもらうことが目的じゃない…。そんな戸惑い…怒りが当時はあったんですね。熱かったんですよ。

山元さんに、「語りがぼろい」という発言について尋ねると、「今まで、お金をもらわなくても、病気のことを話してきましたからね」と即答された。続けて、山元さんが語る物語は山元さんの固有な物語であるが、それは他のメンバーと作り上げたものであることに加え、一旦原稿が出来上がると何度も使うことができる。また、語りの場も事前に筆者ら援助専門職と教育機関の打ち合わせによって、安心して語りができる安全な場が保障されている。そのような語りに対する「ぼろい」という表現だった。法人職員となった山元さんは「自分の限界を知っているの、今は週3回しか働けない」と述べており、賃金は努力の正当化（Aronson & Mills 1959）と捉えている。

このように、金銭的報酬に対して、森さんと山元さんには異なる見解がある。森さんの講演会活動の目的は一人でも多くの語りの賛同者を増やすことであり、その効率性を追求した語りの内容や表現方法を駆使する当然の見返りとして金銭的対価を捉えている。これに対して、山元さんはピアスタッフで得る賃金の経験をもとに、専門職によるお膳立ての上にある語りの金銭的報酬の大きさに疑義を感じている点に違いがみられた。

以上のように、「びあの」の「卒業生」である森さんと山元さんは、その活動に対して、グループの同調行為、ターゲットにした聞き手の層、定型化された語り等に課題があると指摘していた。では、「びあの」の活動を「公共の場の語り」の共通課題として捉えた場合、それはどのような課題であると考えられようだろうか。

V. エンパワメント実践における組織的次元に政治的次元の活動を組み込む方策

エンパワメント実践の組織的次元にあたる「びあの」の活動は「公共の語り」であり、個人的次元の「面接の語り」、対人関係的次元の「グループの語り」とその様式や構造を異にする（柴 2015）。上述した森さんと山元さんの意見の違いは、「公共の語り」の多義性の理解の仕方にあると考えられる。そこで、まず「びあの」の「卒業生」である二人の「公共の語り」に対する意見を「公共性」がもつ意味あいの違いに着目して整理する。次に、両者の「公共の語り」がもつ政治的次元のエンパワメントの可能性を探り、二人の語りの活動を「公共の語り」の活動に組み込む

方策を検討する。

1. 「びあの」の活動を「卒業」した者の「公共の場の語り」に対する疑義

齋藤純一は「公共性」の形式的特徴として、次の三点をあげる（齋藤 2000：viii-xi）。第一に、国家に関する公的なもの（official）という意味。第二に、すべての人々に関する共通のもの（common）という意味。第三に、誰に対しても開かれている（open）という意味である。これに即してみると、「びあの」の当事者の語りは「精神疾患の好発時期にある子ども」に対する「病いの体験から得た教訓」であり、それは「すべての人々に関する共通のもの」（common）と言える。また「学校」という場はある程度閉じられている空間であるものの、聞き手の子どもにとって「義務教育」の場である点で「国家に関する公的なもの」（official）と言える。以上のように、「びあの」の活動は、齋藤が示す3つの特徴すべてを満たすものではないが、すべての人々に関する共通のもの（common）という点や、国家に関する公的なもの（official）という点で公共的と言えなくはない。しかし、森さんと山元さんは「びあの」の同調行為や画一的な価値に疑義を抱き、定型化された語りに忌避感があった。となると、二人の語りの活動は「公共性」の概念枠組みで捉えてよいのかという疑問が生じる。齋藤は「公共性」に関して、上記の三点の形式的特徴に加え、いわゆる「共同体」と区別される実質的特徴を次のように述べる（齋藤 2000：5-7）。

公共性は、…同化／排除の機制を不可欠とする共同体ではない。それは、価値の複数性を条件とし、共通の世界にそれぞれの仕方に関心をいだく人びとの間に生成する言説の空間である。

このことをふまえて、森さんと山元さんの活動の特徴をみると、まず「公共性」は誰もがアクセスできる空間である点については、二人は共同体のように障害の有無という境界線を引かず、障害をもたない人々への理解を求めていることから、彼らの活動は公共性の形式的特徴を充たすものと言える。しかし重要なのは、共同体との違いとして、齋藤が強調する次の三つの特徴である。第一に、「公共性」は複数の価値や意見の＜間＞に生成する空間である、という点である。この観点からみると、二人が社会の精神障害者に対する言説にも、定型化された語りにも疑義を抱いていたこと自体、「公共性」の一つの特徴である価値の複数性と抵触するものではないと言える。第二に、人びとの間に生起する出来事への関心に着目する点である。この観点からみると、二人は「誰もが罹る可能性のある精神の病いの体験」から、その普遍性を語りに盛り込んでいると言える。第三は、「公共性」の空間においては、人々は複数の集団や組織に多面的にかかわることが可能である、という点である。この観点からすると、二人は「精神障害者」というアイデンティティの他、森さんは講演会や執筆を媒介にして、山元さんは法人職員として、多義的なアイデンティティをもち、多面的な語りの場を有していると言える。以上のように、二人の活動は「共同体」とは区別される「公共性」の特徴を満たすものと言えるだろう。さらに重視すべきは、教育制度下にある「びあの」の「公共の語り」とは異なる「公共性」の特徴が二人の活動にある点である。つまり、森さんと山元さんは「びあの」と同様に「共生社会」を目指す、二人の活動は「国家の支配下でない開かれた共通の場」「障害の有無に規定されない平等な人々同士」「異化を認めるコミュニケーションの空間」を重視する特徴がある。この特徴を先述の齋藤の定義を援用すれば、「公共性」とは「国家の支配下でない開かれた場で、障害の有無に規定されない語り手と聞き手の価値の複数性を条件とし、病いの語りを通じて、誰もが罹る可能性のある精神の病いに関心を抱く人々の間に生成する言説の空間である」と定義できよう。

この定義に則してみると、森さんと山元さんの語りの活動は、次のように整理できる。

森さんは、病いの経験をもつ一人の人間として、「公共の語り」は「精神障害当事者が統合失調症をその病いの経験に基づいて自由に表明できるもの」と位置づけており、公共の語りの場は「聞き手との相互交換が可能な開かれた場」と認識していると考えられた。そこでは、誰もが自由に自身の意見／差異の意見を述べ、それに対する賛否は正当な見返りを得ることで評価されうる。そのため、森さんは規範を重視する「教育機関」という公共の場や「びあの」の組織における語りでは、その対象や内容が制限されることを疑問視していた。森さんの「卒業」後の実践とは、それらの枠組みをはずし、市場原理に基づきながら、不特定多数の人々に関心をもつような「語り部」や「語り」に変換させることであり、これに応じた正当な対価を得ながら、理解者を効率的に増やすことを第一義的に重

視していた。このような森さんの活動は公共的領域を「平等な人々の中の、言葉を通じてなされる相互行為の場」「異なった意見を自由に表明し交換可能な開かれた共通の場」とする「アレント的な意味での活動的生」を志向していると言える（谷澤 2012）。

他方、山元さんが認識する「公共の語り」とは啓発活動であり、金銭的報酬を伴わないものだった。その活動は共通の利益／共通に妥当とすべき規範や関心事を指す「公共性（common）」を重視し、子どもに教訓となる定型化された語りと認識していた。しかし山元さんは、それと自身が語りたい内容とに差異があることにジレンマを抱くとともに、子どもに共通の利益となりうる語りを特定の個人／グループが創り上げ、一方的に教授・啓蒙することにも疑問を感じていた。その結果、山元さんは「びあの」の構成員の一人として裏舞台にも入り込み、精神障害者があるのまます受け入れてもらえる場、身近な人々との信頼関係を地道に形成しながら、理に適った形で賛同者が増えていくことを第一義的に重視していた。このような山元さんの活動は、（国家から自立した）社会生活の開放性を重視する「ハーバーマスの意味での市民的公共性」を志向していると言える（谷澤 2012）。

2. 組織的次元の「公共の語り」に社会変革を目指す政治的次元の活動を組み込む方策

では、それぞれの戦略を「公共の場の語り」の活動へと組み込むためには何が必要だろうか。実際には両者が提示した政治的次元の志向性は互いに対立した関係にみえるものの、「公共性」の実質的特徴である価値やアイデンティティの複数性では共通していた。

まず両者の見解が対立する点から整理したい。

森さんの意見に則して、市場の需要に合うエンターテインメント性の高い語りを「公共の場の語り」に組み込むことは、社会に遍在する「精神障害」の言説を効果的に覆す機会になることや、一般的に理解しがたい「統合失調症」の内的世界を伝えることが可能な点で、政治的次元の活動と合致する。だが、そのためには、「語りの場」を市場／不特定多数の消費者へと開放するリスクと向き合うことが必要となる。森さんにとって病いの語りの真価はより多くの市民からの理解を得られるか否かで測られる。上述した通り、森さんはこうしたリスクに卓抜した表現技法を編み出すことで対峙し、自身を含む精神障害者の位置づけを保護すべき対象から抑圧的な社会構造に警笛を鳴らすことが可能な「時代の先駆者」へと変化させ、「精神障害者」だからではなく、特別な語りを語る技法やタレント性をもつ「一人の人間」として評価されるという道筋を切り開いてみせた。

しかし、それは「びあの」に参加した精神障害者の誰もが可能なものではない。さらに重要な点は、森さんが編み出した「誰もが関心を寄せる語り」は、物語性の操作に加えて、語りの技法までも市場の需要に応じて自らが主体的に「創り上げ」なくてはならないことである。それは「ありのままの自分」を語りたい、その語り可能な場を拡大したいと考える山元さんからの「公共の場の語り」に対する疑義、すなわち「リカバリーの物語性」をはじめとして、精神障害者が精神障害者に対する人びとの認識を方向づけることに対する疑義と鋭く対立することになる。

他方で、山元さんの意見に則して、障害者のエンパワメントを目指した「公共性」の語りを「公共の場の語り」の活動に組み込むことは、公（国家など）に関する「公共性（official）」と道徳的・規範的な「公共性（common）」により依拠した活動を展開することになる。ここで目指される活動は、精神障害者と聞き手との強い「結束」「協調」を醸成し、普遍化された物語性ではなく、精神障害者が安心して生きざまを語り、それを理解させる回路を地道に構築していこうとするものである。この場合に適した聞き手としては、反応が不確かな中高生ではなく、同じ精神障害者や当事者の家族・仲間、あるいは精神保健福祉領域の専門職を目指す学生や、精神障害者に対する制度・政策を検討する委員など、精神障害者に対して「すでに」一定の理解を持つ／持つ意志がある者と想定される。このような活動は、社会の周辺に追いやられた仲間の声を代弁する権利擁護活動や、病いを経験した者からその文化を社会に伝える啓発活動へと向かえば、コックスとパーソンズが示す政治的次元の活動と合致する（Cox & Persons 1997）。

しかし、それは、精神障害者のイデオロギーや「ありのままの自分」を共有する共同体／共同性をより強固に構築していくことになりかねない。それは森さんによる「公共の場の語り」の閉鎖性に対する疑義、すなわち限られた人間だけが理解できる精神障害者の語りを、社会の誰もがそこから価値を引き出せるものへと開放すること、他

と異なる経験をした一人の語り手として精神障害者を社会に組み込むことを目指すことと鋭く対立する。

このように「公共の場の語り」に社会変革を目指す、志向性の異なる政治的次元の活動を組み込む方途を検討すると、公共の場の語りには、精神障害者のエンパワメントのための場を「公共の場」のなかに堅固に構築することから始める「ハーバーマスの意味での市民的公共性」と、執筆や講演及び演劇などを含めた障害者の表現技法を多元化することに依拠して「公共の場」における障害者と健常者のカテゴリー／境界を、代替不可能な個人の集まりへと発展的に解消させていく「アレント的な意味での活動的生」があることが明らかとなった。コックスとパーソンズが政治的次元の援助専門職の活動として示した2つの役割を考慮すると、「アレント的な意味での活動的生」にはクライアントとともにソーシャルアクションを起こし、「ハーバーマスの意味での市民的公共性」では同様の目的をもつグループ同士を結び付けることが求められる (Cox & Persons 1997)。

次に、両者の共通部分に目を向ける。森さんと山元さんの「公共の場の語り」には「公共性」の実質的特徴である価値やアイデンティティの複数性に着目する。つまり、二人は個人として、横断的に「病者」「障害者」「仲間」「父親」「法人職員」「執筆者」「演者」など、複数の集合的アイデンティティによって規定されるものの、それは同時にかつ流動的に自らが主体的に使い分けることができていた。それは、「ぴあの」の活動において政治的次元に位置づく「語りの活動発展型」とクリティカルに対立する「リカバリーの物語普及型 (マスターナラティブの生成に依存する者)」「語りの活動模索型」も個人の立場に立てば、それらが同時に流動的にその個人が統制できる「場」になる可能性があることを意味するといえないだろうか。このような「公共性」のアイデンティティの複数性に則して、「精神障害者」に焦点をあてると、従来「精神障害者」の問題は個人に属し、政治システムの「周縁部」で提起された問題と捉えられていた。しかし、非公式な特定の間 (面接やグループにおける語り) において声を発することを通じて、これらの問題に関心を寄せる人々が現れるようになると、その問題に関する「公共的意見 (公共の語り)」が形成される。そして、その「問題」が公式な場で討議されることを経て、精神保健福祉法などの立法を通じた解決の対象となる可能性を生むかもしれない。つまり、政治的次元のエンパワメントである社会変革をもたらす可能性も否定できないものといえる。

文献

- Aronson, E. & Mills, J. (1959) "The effect of severity of initiation on linking for a group." *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59 (2), 177-181.
- ブルーナー, J. 著、岡本夏木訳 (1999) 『意味の復権』 ミネルヴァ書房.
- Cox, E.O. (1989) "Empowerment of the low income elderly through group work." *Social Work*, 35, 149-153.
- コックス, E.O. & パーソンズ, R.J. 著 小松源助監訳 (1997) 『高齢者エンパワメントの基礎』 相川書房.
- フレイレ, P. 著、小沢有作・楠原 影・柿沼秀雄・伊藤 周訳 (1979) 『彼抑圧者の教育学』 垂紀書房.
- ブラマー, K. 著、桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳 (1998) 『セクシュアル・ストーリーの時代 語りのポリティクス』 新曜社.
- Gutierrez, L. M. (1990) "Working with women of color: An empowerment perspective." *Social Work*, 35 (2), 149-153.
- 原 昌平 (2006) 「『当事者』が語る迫力とユーモア」 森実恵 『<心の病>をくくりぬけて』 岩波書店.
- 狭間香代子 (2001) 『社会福祉の援助観 ストレngths視点/社会構成主義/エンパワメント』 筒井書房.
- 伊藤智樹 (2013) 『ピアサポートの社会学—ALS、認知症介護、依存症、自死遺児犯罪被害者の物語を聞く—』 晃洋書房.
- 川浦佐知子 (2004) 「セルフ・ナラティブ (自己物語) を通してのエンパワメント」 『人間関係研究』 13, 122-134.
- クライマン, A. 著、江口重幸・五木田紳・上野豪志訳 (1996) 『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』 誠信書房.
- Lee, J.A.B. (1994) *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press.
- Lewin, K. (1948) *Resolving Social Conflicts*. New York: Harper and Row Publishers.
- 三島一郎 (2001) 「精神障害回復者クラブ—エンパワメントの展開」 山本和郎編 『臨床心理学的地域援助の展開』 培風館、164-182.
- 森実恵 (2013) 「シングルマザーで精神病! だけど私は夢をかなえる」 佐野卓志・森実恵・松永典子他 『当事者が語る精神障害とのつきあい方』 —「グッドラック! 統合失調症」と言おう」 明石書店.
- 野口裕二 (2002) 『物語のケア ナラティブ・アプローチの世界へ』 医学書院.
- 野口裕二 (2009) 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房.
- 岡知史 (1999) 『セルフヘルプ・グループ—わかちあい、ひとりだち、ときはなち—』 星和書店.

Riessman, F. (1965) " helper" therapy principle." *Social Work*. 10 (2), 27-32.

齋藤純一 (2000) 『公共性』 岩波書店.

栄セツコ (2014) 「社会貢献としての病いの語りー精神障害当事者による福祉教育の「場」に着目してー」『コア・エシックス』 Vol.10、109-120.

栄セツコ (2015) 「精神障害当事者にエンパワメントをもたらす公共の語りの場の設計ー語り部グループ「びあの」の実践事例をもとにー」『コア・エシックス』 Vol.11、83-94.

Saleebey, D. (1997) "The Strengths Approach to Practice." Saleebey, D.ed., *The Strengths Perspective in Social Work Practice*, 2nd, Longman, 50-52.

Solomon, B.B. (1976) *Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities*, Columbia University Press.

谷澤正嗣 (2012) 「公共性と市民社会 公共圏とデモクラシー」川崎修・杉田敦編『現代政治理論〔新版〕』有斐閣アルマ、225-259.

山口創生・栄セツコ他 (2010) 「精神障害当事者の語りによる中学生の精神障害（者）に対する意識変容」『精神障害とリハビリテーション』 14 (1)、101-106.

やまだようこ (2000) 「人生を語ることの意味ーライフストーリーの心理学」やまだようこ編『人生を語るー生成のライフストーリーー』ミネルヴァ書房、22-23.

謝辞

本論の作成にあたり、インタビューにご協力いただきました森様と山元様、並びに活動を共にした語り部グループ「びあの」の皆さまに感謝します。

本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の普及に向けたシステム構築に関する研究（課題番号 15KO3996）」及び平成 27 年度桃山学院大学総合研究所特定個人研究費の助成による研究成果の一部である。

The Possibility of Social Change by the Public Talk of People with Mental Disorders

SAKAE Setsuko

Abstract:

To examine the possibility of public talk by people with mental disorders in political dimension, this paper analyzes semi-structured interview with two of progressive members of *Piano*, a mental health volunteer group that organizes public talks in schools by people with mental disorders. As a part of empowerment practice for people with mental disorders, self-narration activities are introduced in mental health support with the dynamic interplay of the individual dimension (face-to-face self-narration), the interpersonal dimension (peer-group self-narration), and the organizational dimension (self-narration in public spaces). However, the political dimension of their self-narration has little been researched. This study argues that, to enable people with mental disorders to tell their stories in a public setting on political dimension, there are two useful aspects: Habermasian citizenship, which aims to establish empowerment opportunity of people with mental disorders in the public space; and Arendtian "vita activa", which progressively dissolve all people into a collection of individuals regardless of mental disorders in reliance on a representation of pluralistic "people with disabilities". When this dimension is achieved, there will be a possibly to produce an empowerment of social change.

Keywords: people with mental disorders, public talk, social change, Habermasian citizenship, Arendtian vita activa

精神障害当事者の語りをもたらし社会変革の可能性

栄 セツコ

要旨：

本稿の目的は、精神障害当事者グループ「ぴあの」の事例研究を通じて、政治的次元のエンパワメント実践について、その一端を明らかにすることである。当事者の語りに基づくエンパワメント実践において、個人的次元（面接の語り）、対人関係的次元（グループの語り）、組織的次元（公共の語り）の全て同時に着目する必要性が指摘されているが、政治的次元の語りに焦点化した検討はほとんどみられない。本稿では、2人のインタビューの検討から、政治的次元の実践には当事者のエンパワメントを目指す共同体を「公共の場」のなかに構築する『ハーバーマスの意味での市民性』と、多元的な「障害者」の表現方法に依拠して障害の有無にかかわらず「公共の場」を個人の集まりへと発展させていく『アレント的な意味での活動的生』があることを明らかにした。この2つの活動を組織的次元の活動に組み込むことで、社会変革のエンパワメントの生む可能性も指摘した。

